

平和ガイドの平和教育的実践活動 —ヒロシマ ピース ボランティアの事例研究

源 氏 田 憲 一

(実践女子大学非常勤講師)

〈要旨〉

平和ガイドの実践についての研究において、従来から「戦争体験の継承」が関心の中心であったが、本研究ではあえてそれ以外の部分、特にガイドの来館者への配慮に注目し、ヒロシマ ピース ボランティアを事例としてインタビュー調査を行った。その結果、ガイドが来館者に様々な「配慮」と「技法」を用いていることが見出された。「戦争体験の継承」も含めて、平和教育、教育心理学的な観点からその意義と課題について考察した。

はじめに

本研究は、広島平和記念資料館（以下、「資料館」と略記）の解説ボランティアである「ヒロシマ ピース ボランティア」（以下、「HPV」と略記）を対象にしたインタビュー調査に基づいて、平和ガイドの平和教育的実践活動の課題について考察するものである。特に、HPV自身の視点からその活動をボトムアップ的に整理し、そこから浮かび上がったHPVの実践活動について教育心理学的な視点からの理論的な理解を試みる、いわば「事例としてのHPV研究」を中心に据える。

以下ではまず、平和ガイドについての日本での先行研究をいくつか紹介する。次にHPVについて、資料館の簡単な紹介も交えて説明し、同時に、資料館側がHPVに対してどのような期待をしているのかについて、資料館の館長（当時）へのインタビュー結果を簡単に紹介する。その上で、HPV 5 名に対して実施したインタビュー・データの分析結果を提示する。最後に、分析結果を理論的に考察し、平和ガイドの平和教育的実践活動の課題について考察する。

1. 平和ガイドに関する先行研究

まず日本における平和学習に関わる平和ガイドの先

行研究について、網羅的ではないが、いくつか紹介していく。これらの研究の検討を通じて、本研究の視点を打ち出していく。

日本での平和ガイドに関する先行研究として、まず目につくのは沖縄の平和ガイドに関するものである。戦跡、基地などを案内し、沖縄戦や基地問題などについて語る沖縄の平和ガイドの実践について、ガイド当事者側からの実践報告（例えば、大城、2001；高嶋、2001）、や、ガイドの現場へのフィールドワークによる研究（例えば、北村、2006；杉田、2006a；2006b）などがある。さらに、長崎の原爆資料館の解説を中心に活動をしている「平和案内人」についての研究（富永、2012；富永・葉柳、2010）や、立命館大学国際平和ミュージアムのボランティア・ガイドの研究（福西、2012）なども見られる。

これらの研究・報告で大きなテーマとなっているのが、平和ガイドによる「戦争体験の継承」の問題である。いわゆる「語り部」、「証言者」とは異なる存在である平和ガイドは非体験者が中心であり、そうした戦争体験のない平和ガイドがいかに戦争や平和について語るのか、という問題を意識せざるを得ないことは理解できる。しかしこれらの研究が示していることは、実際に平和ガイドが行っている実践は、単純な「継承」では収まらない、ということである。それは「語り手Aによって語られた証言が、一字一句違えず聞き手Bへ伝えられて完了といったベルトコンベアー式の作業ではない」（北村、2006）。例えば、福西（2012）は、平和ガイドの「語り継ぐという枠組みではとらえきれない新たな実践」について明らかにしている。それは、「学習により自らの体験や伝聞したことに客観的事実を付け加えていく」ことであったり、「展示室内において周囲とのコミュニケーションの中で『語る場』を作りだし、そこへ参加すること」であったりする。従って本研究でも、狭い意味での「継承」という問題を焦点とせず、HPVの実践についてより包括的に見ていく。

第二に指摘できる点は、聞き手に対する配慮の問題

である。杉田 (2006b) は平和学習の「言葉がここに届かない」(下鴨、2006)、『「平和は強制されるもの」というメッセージ」が届く (古賀、2005)、という問題に対して「対話や創造性に乏しい学習過程は、平和学習の本来の目標を達成できずに終わる可能性がある」としている。同様に福西 (2012) も、来館者の言葉をガイドが「聞く」ことの重要性を強調している。しかし先に紹介した平和ガイドの先行研究全体で、こうした聞き手に対する平和ガイドの配慮は、前面に押し出されるテーマとはなっていない。それは先述のように、これらの研究の主要なテーマが平和ガイド自身による「戦争体験の継承」にあり、杉田 (2006a、2006b) を除いては平和ガイドによる「教育」を中心にしていないからである。平和ガイドをどのような存在として捉えるかについては、様々な視点がありうるであろうが、聞き手＝平和学習者を何らかの形で支援する存在と見ることは可能であり、ならばそこに何がしかの教育的な実践が含まれると見ることもできるであろう。従って、聞き手に対する「伝わり方」への配慮の問題は見過ごすことはできない。そこで本研究では、「戦争体験継承者としての平和ガイド」という視点の重要性は認識しつつ、あえて別の視点として、「平和教育者としての平和ガイド」という視点を採用し、来館者＝平和学習者への配慮、という切り口からHPVの実践を整理する。しかし、「戦争体験の継承」の問題には、考察で立ち返る。

第三に、現場の意識との関連である。およそ研究というものが何らかの情報的価値を持つためには、今までにない視点を打ち出すべきかもしれないが、それは同時に、現場の内在的な理解を妨げることにもなりかねない。例えば、「記憶の政治」をテーマに平和ガイドの「継承」を「語り直し」と捉えた北村 (2006) や、「歴史の物語論」の立場から平和ガイドの主体性を強調した富永 (2012；富永・葉柳、2010) は示唆に富むものではあるが、これらの研究の背景となっている、ポストモダンの視点は、現場の平和ガイドの史実実証主義的な態度とは乖離がある。そこで本研究ではよりHPV自身の視点を内在的に理解することを目標に、HPVへのインタビューを通じて研究を行うこととし、分析の際もボトムアップ式の分析方法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) に準じた方法を中心とする¹⁾。

2. HPVの位置づけ

HPVへのインタビュー結果に移る前に、2009年に発行された、HPVによる『ヒロシマ ピース ボランティア10年誌』を参考にHPVの簡単な紹介をし、さらに資料館側がHPVをどのように位置づけているのかを、館長 (当時) へのインタビューで確認しておく。

「被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料を収集・展示するとともに、広島市の被爆前後の歩みや核時代の状況などについて紹介」(資料館リーフレットより) する施設である、資料館は、被爆後50年を過ぎた頃から、入館者数が毎年減少し、その対策に迫られていた。その時、職員から「美術館のように展示を解説するボランティアを資料館にも取り入れたら」というアイデアが提出され、1998年9月に「平和学習支援ボランティア」(後に「ヒロシマ ピース ボランティア」と正式に命名) として人員の募集が行われた。年度により若干異なるが、募集はおおむね前年の秋に実施され、翌年の2月、3月ごろまで研修を実施、4月から実地に配属される。HPVは都合の合う曜日を選び、その曜日ごとにグループを形成し、基本的には月2回以上、10時から16時まで (開始・終了時のミーティング各30分を含む) の活動に参加する。活動は3種類あり、①資料館の内部を、来館者に同行して移動しながら順次解説を行っていく「館内移動解説」、②資料館内の任意の位置に立ち、通りかかった来館者や声をかけてきた来館者に説明をする「館内定点解説」、③資料館の位置する爆心地の公園である平和公園内を移動解説する「公園の移動解説」、が行われている。また、有志による自主的な勉強会や研修・見学会、個人的な勉強なども行われている。これ以外に、年3、4回程度行われる議決機関としての「幹事会」、年2回の「全体会」がある。HPVの代表として「代表幹事」、「副代表幹事」があり、資料館側の窓口には資料館の「啓発課」職員があたっている。現在の資料館は東館と本館の2つの建物からなっており、2010年8月付のHPV向けの資料館のマニュアルでは、東館が「平和学習の場」、本館が「被爆体験継承の場」として位置づけられている。それぞれの展示概要は、東館1階が被爆前の広島市の歴史、原爆の開発から広島への投下まで、2階が広島市の復興の様子、3階が核兵器をめぐる世界の状況、広島市などの平和に関する取組、であり、本館が広島市の原爆被害の実相、被爆者の遺品、被爆資料の展示、証言ビデオ、となっている。HPVの館内での解説は主にこれらを対象とする。2010年4月1日

時点でのHPVの人数は197人（男性71人、女性126人、平均年齢60歳）である²⁾（2010年4月1日付啓発課資料より）。『ヒロシマ ピース ボランティア10年誌』によれば、移動解説の実績は、館内移動解説が初年度の1999年度158件から2008年度には6倍以上の976件（人数8332人）、公園の移動解説は1999年度7件から2008年度499件（人数7111人）であり、HPVへのニーズは着実に高まっている。

ではこうしたHPVについて、そのガイド活動はどのように特徴づけられるであろうか。先述の長崎の平和案内人について、富永（2012）は、自身の平和案内人での活動や観察を踏まえ、平和案内人が、正確な情報伝達を課せられることで定型的な解説を反復し、聞き手との相互作用が築かれにくくなっており、しかも運営主体から配布されるマニュアルにより、指示された実相や数値の伝達に重点を置こうとするようになっている状況を指摘している。多少誇張して受け取ると、平和案内人が指定されたマニュアルに従ってガイドを実施している（させられている）イメージが形成されてしまう。

しかしこうしたイメージは平和ガイドの一般的な実態なのであろうか。高嶋（2001）は、沖縄の平和ガイドである琉球大学生平和ガイドを運営してきた経験から、「学生たちは講義で学習した知識をまず正確に伝えることに精力を注ぐ」が、「自信が持てるようになると」、「個性を出そうとしたり」、「多面的な説明を試みたり」など、次第にガイドの語りは定型的ではなくなることを指摘している。また、平和博物館ではないが、アメリカの全米日系人博物館のガイドについて菅（2011）は、ガイドが来館者の質問に応じたり、来館者の属性に応じて様々なストーリーを紡いだりするなど、博物館と来館者のインターフェイスになっている、と述べている。同様に平和博物館ではないが、日本の「大和ミュージアム」の展示室内ボランティア・ガイドについて福西（2011）は、ガイドの内容が人によってそれぞれで、来館者の年齢、性別に応じて内容が変わると指摘している。これらは（平和）ガイドが公式のマニュアルではなく、来館者のほうに対応していることを示唆している。

こうした平和ガイドのガイド方針には、運営の側の意図も関与しているであろう。そこで、HPVの来館者への対応という点を中心に、2012年9月12日に資料館内で実施したインタビューでの館長（当時）の発言について拾い上げてみる。

まず、「資料館としてHPVに期待する役割・活動」

「来館者にとってHPVはどんな存在であってほしいか」という質問に対する回答として、「被爆資料であるとか、遺品を観てもらおう、それから感じてもらうことが一番」と前置きをした上で、「とは言いながら、来る人には様々なレベルの人がいて、相当に高い関心を持って、より、あるいは予備知識を持って来ている人もいれば、観光客みたいにさっと通る方もいらしたりして、様々なレベルと、様々な、関心に方向性ってのもある訳で、それに応じた説明って言うか、情報の伝達が出来ればいいと思ってる」としている。そして「ボランティアとしての年数が長い人は相手のニーズに応じて」くれているという現状認識を示している。加えて、「さっと観ただけじゃあ分からないような事とか、少し、より深めの情報を、持って帰ってもらおう、あるいは伝えるための補助者になってもらえればいいのではないか」としている。従ってここでは明らかにただ展示をなぞるだけのものではなく、多様な来館者への対応と、より深い学習の補助がHPVに期待されている。同時に、「高みに立って欲しくは決していない」、「『私がよく知っているから教えてあげる』っていうそういうスタンスは良くないと思うから、そこは注意してる」と述べているように、そこにはある種の対等性が期待されている。

さらにそうしたHPVについて「ある意味での画一的なスタイルとか、こういう風にして欲しいっていう事も、ひょっとしたら出来たのかもしれないけども、ピース・ボランティア活動の最初から、あんまりそういう事をしてきてない」、「もう十分、ボランティアの方々、それぞれのスタイルを確立してると思います」として、HPVのマニュアル的な画一性を目指す必要性は感じていない発言があった。

以上から、「情報の伝達」という限定的な表現は使われているものの、資料館側としてHPVに、マニュアルに縛られずに来館者に柔軟に配慮・対応することがかなり期待されていることがわかる³⁾。しかも、そこには「教え—教えられる」という垂直的な関係ではなく、水平的な関係性が期待されている。従って本研究の視点である「来館者への配慮」という問題意識が、運営側においても持たれていることが確認できた。

3. HPVへのインタビュー

次にHPVへのインタビュー調査に移る。

3-1. 調査の概要

はじめに予備調査として、筆者が2009年8月に資料

館を訪れた際に館内の移動解説を担当して知り合ったHPV 1名(表1のAさん)に2010年8月17日に半構造化インタビューを実施した。インタビューに先立つ事前準備として、2009年の接触時にインフォーマル・インタビューを実施、HPVの10周年活動報告『ヒロシマピース ボランティア10年誌』を読み込み、毎週1回配信される、HPV内での有志の情報交換のメールマガジンを2009年10月以降全て読んだ。予備調査での基本的な質問内容は、源氏田(2008)の被爆証言者のインタビュー研究に基づき、「なぜ伝えるのか」と「何を伝えるのか」という2点に集約される。

この予備調査での対象者を含む5名(表1;追加の4名は機縁法によりAさんに紹介して頂いた)に対し、2010年9月12~14日に半構造化インタビューを実施した。質問の中心はHPVが「何を伝えるのか」ということにあった。さらに2011年8月29日~9月2日に、同じ5人のHPVに対し2度目の半構造化インタビューを実施した。HPVが解説によって、「何を伝えるのか」、「どう伝えるのか」に関し、より具体的な解説内容を中心に質問した。インタビューは全て平和公園内で行い、時間は概ね1~2時間程度であった。全てのインタビュー内容は対象者の許可を得てICレコーダーで録音、トランスクリプトを作成した。なお、事前に調査目的・条件について書面を渡し、回答の任意性とプライバシーの保護に関して十分な説明を行った。

表1 各対象者の特徴

	HPV 歴	性別	年齢
A さん	11 年目	男	60 代
B さん	6 年目	男	60 代
C さん	4 年目	男	70 代
D さん	4 年目	女	60 代
E さん	2 年目	女	60 代

(2010 年調査時点)

(D、E さんは戦後生まれ。全員被爆者ではない)

3-2. HPVは何を伝えているのか？

本研究の主題である来館者への配慮の問題に入る前に、補助的な結果として、HPVが解説で伝えている内容について、インタビューでの発言をもとに整理・分類した結果を簡単に示す。ここでの分類はインタビューを基にしたものではあるが、厳密にコーディングした結果ではないので、暫定的なものである。

ここでの手続きは以下のように進めた。事前に、根本(2010)にある被爆証言の2つの理念型(「体験者としての語り」と「平和教育としての語り」)や、源

氏田(2008)のインフォーマントとのその後の個人的会話から着想を得て、「被爆体験の継承」と「平和問題に対する意見の発信」の2つのカテゴリを設定し、これを念頭に予備調査で質問を行った。予備調査での発言から第3の分類として「客観的事実」を付け加えた⁴⁾。そして2010年の調査でこれら3分類を踏まえてインタビューを行い、データを読み込んだ。さらに2011年の調査で、この3分類について対象者にフィードバックし、その妥当性について確認を求めた。その結果、さらに「希望の提示」というカテゴリが2名から指摘された以外は特に大きな異論は出なかった⁵⁾。

以上の手続きを経て、【伝えていること】が《客観的事実》、《体験の継承》、《意見の発信》、《希望の提示》の4つに分類されるという仮説が生成された。この4分類に関連すると思われる発言をいくつか以下に抜き出してみる。

まず、《客観的事実》であるが、これを特に重視するAさんによれば、「もう別に感情も込めずに、ほんとに事実を、その代わり絶対に事実を」、「被爆体験って言っても、その、個人のね、被爆体験と、からもう、ヒロシマっていうかさ。〈筆者：全体像っていうか?〉うん、全体の被爆体験というのがあると思う」、「個人的な体験どんどん入っていったら、自分の、事実じゃないこともやっぱり、見た時の感覚?」と発言している。Aさんにとって《客観的事実》は感情・感覚・思いとは独立したものであり、個別的なものというよりは統計的に表れるような「全体像」や「データ」であり、その意味で厳密には個人的な体験談とは区別される。

次に《体験の継承》であるが、これは、先の《客観的事実》についての発言での対比からわかるように、感情・感覚・思いなど主観的なものも含めた個別的で個人的な体験の話を伝えることであると言える。これに関してDさんは「心をね、わかってもらって」と述べている。

一方《意見の発信》は、平和に関連した意見を発信することである。例えばこれを重視しているDさんは「そして一番、あの、あるのは、どういう社会にしたい、という、この子達に何を言いたい、伝えたいかという、そんな思い。」と述べている。またEさんは「まあ色々こう、そういう思いを伝えられたらいいなあって。〈筆者：思い?〉思いですね。ああ、まあ、こんなに、ね、悲惨なものを、作っていいんか、っていう」と述べている。特に、資料館の設置趣旨が「原子爆弾による被害の実相をあらゆる国々の人々に伝

え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するため、広島平和記念資料館（中略）を設置する。」（広島平和記念資料館条例第1条）ということもあり、核兵器廃絶・世界恒久平和、という意見の発信は、HPVの共通認識と考えられる。

《希望の提示》について、これを指摘したAさんは「あれだけ破壊されたもんでも、これだけ復興できるんですよっていうのは、やっぱり世界にとってのものすごいメッセージだと僕は思うよね。だから、そういう面も伝えたいなあ」と述べている。同様に指摘したCさんは（被爆した人が）「ちゃんと生活が出来る。人間として生活出来る、というの、これはもの凄く大きな希望になるんじゃないかと思うんですよ」とも述べている。つまり、広島市の街の復興、あるいは被爆者が力強く生きていること、それらを通じて人々に希望を伝える、という側面である。

以上から、HPVの伝えていることについては、全体として、（被爆）「体験の継承」だけでなく、史実実証主義的な「客観的事実」や、平和への思い、そして破壊から立ち上がる人間や社会の力強さや希望、といった幅広いことがらが含まれている、と言える。

3-3. HPVの来館者に対する配慮

次に、HPVの来館者への配慮に関する分析に移る。ここでの分析手続きは以下の通りである。まず、「調査の概要」で説明した予備調査と、その後の2度の調査のトランスクリプト全てをデータとして、質的データ分析ソフトウェア（QDAソフト）であるMAXqdaを用いて、発言内容のコーディングを行った。コーディングに際しては、GTAに準じた方法である佐藤（2008）のQDAソフトの手引き、及び、木下（2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を参考にした。これらの方法のGTA（例えば戈木、2008）との大きな違いは、データを切片化せず、コードの重複を許容する点である。さらに、データ収集と分析を同時進行で行うGTAとは違い、全てのデータ収集後に分析を開始した点ではM-GTAに準じている⁶⁾。また、分析の際に事前に前提を置かないGTAとは違い、M-GTAに従い、分析テーマと分析焦点者を設定した。分析テーマとは、研究者の関心に従ってデータの意味の解釈、その選択的判断を行うための明確化されたテーマであり、分析焦点者とは、分析の上での視点として設定される、特定の人間の視点である。これらにより、分析に方向性を持たせるのである。ここでは、分析テーマを「HPVによる来館

者への配慮」、分析焦点者を「HPV」とした⁷⁾。その上でMAXqdaを用いて分析を行い、コードが浮上した場合、それにコードメモをつけ、適宜修正しながら内容を深めていった。コード自体も適宜修正していき、それらをまとめていった。M-GTAの用語では、下位コードから順番に「概念」、「サブ・カテゴリ」、「カテゴリ」と呼ばれる。一旦出来上がったコーディング結果を、調査対象者でもあるベテランHPVのAさんと、平和ガイドに詳しい平和心理学者1名（杉田明宏氏）にチェックを依頼した。また、杉田氏にはカテゴリについてのアドバイスも頂いた。これらを踏まえ、コーディング、および、コード名、コードメモの一部を修正して最終的な結果とした⁸⁾。簡略化した分析結果を表2に示す。

まず、来館者に対する解説の一般的な【技法】というカテゴリがある。これらは、通常、来館者の全般に対して用いられる、解説をわかりやすくする方法である。《エピソード》、《イメージ》、《テーマ》の3つのサブ・カテゴリが見出された。《エピソード》は、解説の中に被爆者の事例や、逸話、体験または具体的な出来事などをエピソードとして説明に加え、実感を湧きやすくする技法である。「心に届く」、「なるほどと思ってもらえる」という指摘もあった。自身の経験したこと、例えば直接の被爆ではないが、戦時中の経験、あるいは、被爆者との出会い、証言を聞いた経験の披露なども含む。しばしば、資料館の展示にないエピソードを付け加える形で行われる。例えばDさんは被爆孤児のパネルで、親戚の家で食事を十分与えられず、さらに親戚の子から非難されたという被爆孤児の辛い体験を語り、Eさんは、急性障害の事例として出てくる山下博子さんの展示において、山下さんがその後結婚・出産し、その子が指揮者で活躍している新聞記事を見せながら解説している。

《イメージ》は、来館者にイメージが湧きやすいように比喻や事例を織り交ぜることである。これには2つの概念がある。一つは〈物理的データのたとえ〉であり、物理的なデータの数値を理解するために比喻を用いる方法である。例えば、Aさんは原爆の火球の大きさ280メートルを資料館全体の建物よりも大きいと表現したりする。二つ目が〈実物・写真〉であり、展示資料の実物や写真などを活用してイメージを得る方法である。ビデオ・録音を用いることもある。例えばEさんは展示の被爆瓦に触るコーナーで、来館者に触るように促して解説を行っている。

《テーマ》は解説に抽象的なレベルでのテーマを持

表2 「来館者に対する配慮」のコードのまとめ

技法		解説に用いる技法・方略。一般的に来館者にわかりやすくする工夫。
イメージ	実物・写真	展示資料の実物や写真・音・映像などでイメージを得る 例)「川岸にね、そこに降りて行って、話をすることあるんです。(中略)そこで話をするんですけど、そしたら、この元安川に死体が一杯あったと」(D)
	物理的データのたとえ	数値に、来館者にイメージが湧きやすいようにたとえを織り交ぜること 例)「19トン。1トンいうたらね、普通車がおおた1トンとってくださいいうて。普通車がね、19台分です」(B)
エピソード		逸話、体験または具体的な出来事などをエピソードとして説明に加え、実感を湧きやすくする 例)「パノラマの中じゃから、レストハウスの地下にたまたま書類取りに行った人が一人とか」(E)
テーマ		抽象的なレベルでテーマを考えて解説のプロットを作る 例)「やっぱり生命の尊さというの感じ出したいいうのかな?その、あの、展示の説明を通じてね」(B)
配慮		来館者に対する配慮。来館者の個性や特殊性、多様性、特別の事情を尊重し、相手に合わせる、来館者の側からの働きかけに応じる、やりとりをする。
意見の差し控え		自分の個人的な意見を言うことは差し控えること、押し付けにならないようにすること 例)「オーバーになったり、その、押し付けになったり、っていうことではね、いけないとは思いますが」(D)
質問・反応に応じる		来館者からの質問や、反応に応じること、対応すること 例)「向こうから質問が出ないようなガイドはね、ああ今日は失敗したな、という感じですよ」(C)
外国人への配慮		「淡々と説明」、「復興」、「友好関係」、「役割分担」 例)「いやあ僕〜にね、4年間いたんですって、たらそれで、ふっとこう、和むわけですよ」(A)
子供への配慮	話題	子供が関心を引くような話題を出す 例)「『はだしのゲン』書かれた中澤さんが、あの、通われたところよって言ったら、子供達が目撃かす」(E)
	問いかけ	来館者に問いかけをして発言を引き出す 例)「世界地図の中に、その、ヒントが隠されている。香取さんの平和に対する思いが隠されている。なんですよ。何でしょうか、言うて」(C)
	身近な話	来館者(特に子供)にイメージしやすいような、現在の日常生活での身近な話に引きつけて説明する 例)「きょんとんとして聞きよったら、ボクお父さんとお母さんと当分別れて生活しても大丈夫かいって言うて」(B)
	役割分担	不得意なので得意な人に任せる 例)「子供の扱いにも、エクス、エクスパートが、子供に向って説明するほうが」(A)

(カッコ内アルファベットは発言者)

たせる方法である。例えばAさんは、公園の移動解説では全体としての「ストーリー」が作りにくいことを指摘したうえで、「世界の人の連帯」をそうした「ストーリー」(テーマ)の一つとして挙げている。

次に、来館者への【配慮】のカテゴリがある。これは、来館者の特殊性・多様性への対応、尊重、来館者との双方向的なやりとりや来館者の側からの影響への対応を含む。サブ・カテゴリとしては《質問・反応に応じる》、《意見の差し控え》、さらに《子供への配慮》と《外国人への配慮》が見出された。

《質問・反応に応じる》は、来館者からの質問や、反応に応じることである。質問に答える、答えようと努力をしたり、さらに解説をつなぐ、相手の熱意により解説内容を変える(特に熱心な人にだけ話す内容など;全員)こともある。意見を求められて、個人的なものや前置きしたうえで意見交換をする(Bさん)、あるいは、来館者からの質問や反応を受けて解説の仕方を工夫したり、個人的に作成しているマニュアルを変更したりすることもある(Aさん)。これに関して、Aさんは「関係ないような」質問でも「出来るだけ答

えたい」と述べ、Cさんは「一番充実感感じるのは」、「やり取りがあった時」と述べている。

《意見の差し控え》は、HPVが自分の個人的な意見を強く言うことを差し控えることである。来館者から意見を求められた時に「個人的なもの」として言うことはあるが、自分からは言わない(B、Eさん)、または押し付けにならないように(Dさん)、という発言がみられた。来館者に判断してもらう(Cさん)ということであり、「事実」を伝えれば判断してもらえる(Eさん)、というある種の信頼も見られた。偏った意見を言って、事実を言うときでも来館者にバイアスがかかっていると疑われることは避けたい、という発言もあった(A、Bさん)。これは「事実中心」という資料館側の方針とも関係しているようである。

次に《子供への配慮》だが、これには概念として、〈身近な話〉、〈話題〉、〈問いかけ〉、〈役割分担〉の4つが見られた。〈身近な話〉は、来館者にイメージしやすいような、現在の日常生活での身近な話に引きつけて説明する方法である。特に子供の目線に合わせた説明が多く、例えば佐々木禎子さんがそれほど遠い昔

の人ではないことを説明する時に、自身が禎子さんの同じ小学校の2つ下であることを話す（Dさん）、青空学級の話で自分の学級のことを想像させる（Bさん）、などである。〈話題〉は子供の関心があるような話題を出すことで、例えば、「はだしのゲン」の作者中沢氏のことを挙げて、子供に関心を持たせることや（Eさん）、公園の移動解説で、学生相手のときは「教職員の碑」などの学校関係のところを案内する（Bさん）、などである。〈問いかけ〉は、問いかけをして発言を引き出す手法であり、特に子供に関する言及が多かった。双方向的に進める工夫か、もしくは子供の関心・自発性を引き出すためと推測される。例えば、韓国人原爆犠牲者慰霊碑の説明で、広島に韓国の人がどれくらいいたと思うかクイズを出して回答を色々出してもらう（Dさん）、などがあった。〈役割分担〉は解説ではないが、子供は得意な人に任せる、という方針である。

最後に《外国人への配慮》であるが、実際に外国人に向けた解説を行っている人物が対象者中2名のみで、以下の配慮は友好関係についてのものを除いて一名によって報告されたものでしかなく、バリエーションがないためこの結果は暫定的である。基本的に、自分達が非難されているという外国人（特にアメリカ人）の警戒心を和らげる配慮が見出された。感情を出さず、中立でフェアな立場から事実を伝え（淡々と説明）、援助提供や交流、寄贈、植樹、自身の海外経験など国家間の友好関係を示唆する話題を話し（友好関係）、復興の話で和ませる（復興）。この他、外国人に対して役割分担をして担当する旨の発言もあった（役割分担）。

以上から、HPVが来館者に対して、何がしかの配慮をしている様子がうかがえた。

4. 考察

以上の結果をもとに、図式化を試みた（文末の図を参照）。まず、【伝えていること】として、暫定的に、《客観的事実》、《体験の継承》、《意見の発信》、《希望の提示》があり、それらを伝えるときに、《エピソード》、《イメージ》、《テーマ》という来館者にわかりやすく伝える【技法】を用いつつ、《質問・反応に応じる》、《意見の差し控え》、《子供への配慮》、《外国人への配慮》など、来館者の多様性、独自性を尊重し、来館者からのフィードバックに対応したり、双方向的に進めたりする【配慮】をしている、という解説の様子がうかがえた。従って、館長（当時）がインタビューにおいて

HPVに期待していたように、HPVは来館者に対して、何らかの形で対応しており、それは一般的に工夫をすることで、何とか展示をわかりやすいものにしようという努力であることもあるが、来館者の多様性や個性に対して配慮し、相手の反応や質問に応じていることもあることがわかった。

では、こうしたHPVの解説実践は、理論的にどのような解釈でき、そこにどのような課題が存在するのだろうか。このことを検討するために、より広い理論的文脈に位置づけ、今後の展望を得たい。まずは教育心理学的な観点から、佐伯（1993）の「学びのドーナツ論」を参照する。

佐伯（1993）によれば、学習は「I」、「YOU」、「THEY」の3つの世界を「学びを広げていく際にくぐり抜け、かかわっていくプロセス」として説明できる。「＜納得がいく＞学び」のためには、まず「人とは違う」自分流に「わかろうとする」、「Iの世界」をくぐる。しかし、「他者に心を開き」、「もっと深い納得をもとめて、対話する」ことも必要である。そのために、自分の「こだわり」を「肯定してくれる」人、あるいは、それほど理解せずとも「つきあってくれる」人が、「視点を変えて」、「『自分（わたし＝I）の世界』を安心して『外から見る』ことができる」ことを保障する必要がある。これが「YOUの世界」である。だが、この「YOU」は同時に「外側の世界」、「ホンモノ」である「THEYの世界」を背負わなければならない。そして、「I」と「YOU」が出会う「第一接面」（親しみやすく、わかりやすい側面）、「YOU」と「THEY」が出会う「第二接面」（現実社会とかかわりを持つ側面）のありようが難しい。第一接面ばかり重視すると、「仲間意識の強化ばかりに気をとられて、『さらに外側へ向かう目』が育たなくなる」。第二接面を強調しすぎると「話は『立派』で『ごもっとも』だが、自分とはカンケイナイこととして子どもは逃げる」。

この「ドーナツ論」に当てはめてHPVの活動を考えてみる。まず「YOU」のHPVと、「I」の来館者との出会う「第一接面」では、【技法】と【配慮】により、HPVが来館者に「つきあい」、「肯定する」。これが来館者に「『ごもっとも』だが、自分とはカンケイナイ」とされることを防ぐことになる。こうした配慮を、HPVが来館者との間に「相互的・水平的関係」（杉田、2006b）を築く努力と捉え、そこに杉田（2006b）の言う、対等で真に平和学習的な関係での学びを見出すこともできる。しかしそれが行き過ぎると、来館者の「外側へ向かう目」が育たなくなる理論的な可能性

が、佐伯の議論から浮上する。つまり【伝えていること】に関連すると思われる「第二界面」の問題である⁹⁾。これと関連して、あるHPVは、「相手の人に合わせて解説するっていう」ことに「あんまり反論はしないんだけど」、「自分のね、言いたい事あるはずなんよ」と発言をしていた。つまり、「言いたい事」と来館者への配慮との、一種のジレンマである。HPVは両者のバランスを探らなくてはならない（文末図中【A】）。

しかし、学習者（I）が「外側の世界」と交流を持つために、道案内役（YOU）は「外側の」真正な文化的実践のコミュニティ¹⁰⁾を背負うべき、との佐伯の議論を適用するなら、これはHPVが「個人的に言いたいこと」の問題に止まらない。上記のバランスは、「ホンモノ」を背負ったHPVが、それを踏まえて「言いたいこと」と、「来館者に合わせること」のバランスの問題であるかもしれない。従って、実はHPVが「ホンモノ」を背負わなければ、それが真に望ましい学習のためのバランスかは保証されない可能性もある。しかし佐伯の議論は、抽象的な説明の道具である感否めず、HPVにとって「ホンモノ」や「コミュニティ」とは何か、という点は不明である。そこで次に、資料館や長崎原爆資料館の展示に関する議論を参考に、「戦争体験の継承」の問題を考えてみたい。

深谷（2008）は、長崎の原爆資料館の展示に複数の「コード」（ある意図に従った展示の文脈に乗せるため、第3者が資料に付与する「意味づけ」）が含まれることを見出した。それは大別すると、解説展示の歴史・科学的説明と、共感・残酷さなど感情を喚起する提示的展示（写真や遺品など）による被害の痕跡に分けられる。続いて深谷（2009）は、記憶の継承の2側面として、記憶から規範的価値を取り出して思想化・再構成することで継承する側面と、非言語的・身体的に実感される「生のままの記憶」の側面を指摘し、両者の両立の難しさを踏まえ、「継承」の内実を問うべきとした。

以上から、「戦争体験の継承」には、「歴史・科学的説明／規範的価値」の側面と、「身体的実感／感情／体験」の側面があり、先の佐伯の議論での「ホンモノ」は、主に前者に関連すると考えられる。さらに、村上（2009）は、平和教育への伝統的教育学のアプローチでは、「平和教育はいかにあるべきか」という規範的教育理念に基づき、よりよい実践を検討する、としているが、上記の「歴史・科学的説明と規範的価値」の側面とは、こうした教育的な面と重なる部分が多い。HPVの活動する資料館は、「核廃絶」、「恒久平和」の

理念を掲げ、「被爆の実相」の普及のためにより良い実践を目指しているという意味で、こうした規範的・教育的な「継承」と重なる。従って、HPVが背負うべき「ホンモノ」の一つはこうした「歴史・科学的説明と規範的価値」の側面であると言える。

しかし、その議論からこぼれ落ちた重要な側面として「身体的実感・感情・体験」の側面があり、これをもう一つの「事実」と考えることができる。この「こぼれ落ちる」記憶の問題を「フレーム」の問題として捉えなおしたい。Naono（2005）は、1994年の資料館リニューアル時の日本の「加害」展示をめぐる論争を題材とし、右派の主張する戦時中の日本の「被害」の強調も、左派の主張する日本の「加害」の強調も、いずれもnationalistのフレームを相対化できていないと批判している。そして、記憶のnationalなフレームを流動化させ、「ヒロシマの心」が国境を越えたものになる可能性を広げるべきと主張した。つまり、記憶の継承は特定のフレームに基づいており、時にこうしたフレームを破壊しなければ、そこから「事実」がこぼれ落ちる。先の平和教育の「理念」や「規範的価値」、あるいは資料館展示の「コード」も、こうしたフレームの一つと考えることもできる。HPVや来館者など個人にも、個別の「フレーム」（または「スキーマ」）が想定できる。

こうした「フレーム」に対し、記憶の「体験」の側面を取り上げることで、それを破壊・変容させる可能性がある。例えば、Naono（2005）は元「従軍慰安婦」の証言のインパクトを指摘している。他方、HPVの中にはこうした側面を「継承」しようとする動きもあり、複数のHPVからの発言で、記憶の「体験」の側面に、来館者と展示との間を埋める役割（「つなぎ」、「身近に感じる」）が期待されていた（【技法】の〈エピソード〉）。

従って、HPV全体としては「戦争体験の継承」の2つの側面が混在しているが、必ずしも深谷（2009）の指摘するような背反するものではなく、一部に融合が見られた。しかし、やはり「体験」の側面は戦争体験者の持ち味である。「気持ち」や「暑さ、寒さ、音、臭い、ひもじさ」など感情・感覚的な理解の難しさ、体験者の「説得力」、「オリジナルな言葉」による重み、を指摘するHPVもいた。他方、「平和教育」の側面は非体験者の持ち味と言うことができ、HPVの一人は、科学的説明と伝え方、そして被爆者の「苦しみ」の総合力でHPVの自負がある、と発言していた。また、別のHPVが、「体験の伝承」ではない、「平和の継承」

活動としてHPVを位置付けていたように、規範的なメッセージ性を付け加えることもできる。

こうした「継承」のために、非体験者としてのHPVの行っている活動と工夫について、自己研鑽と解説の両面からまとめると、まず、自己研鑽では、歴史的・科学的情報の収集がある。読書、講演会参加、資料館の情報資料室や学芸員の活用、HPV間での情報交換・勉強会、フィールドワークなどである。同時に、記憶の「体験」の側面の継承として、映像や手記、講演などで被爆証言に触れる、被爆者との出会い・交流などがある。特にこの側面で、「向き合う」、「思いを分かろうとする」という真摯な姿勢が見られた。一方、解説では、被爆者・死者の立場に立つ、「自分だったら」と想像し、被害を人に置き換える、という工夫や、「偏っている」と疑われぬよう意見を控えるという工夫が見られた。こうした活動に、先の「フレーム」についての議論を援用するならば、常に自身の「フレーム」を自覚し（心理学で言う「メタ認知」（認知する自分への認知：丸野、2008））、これを問い続ける姿勢が重要であろう。知識を吸収し、解説を組み立てる際には「事実」の選択と編集が行われるが、この際、自分がどのような「フレーム」に従っているのか意識・反省することで「継承」の内実を問うことができる。そうした不斷の努力がHPVを「THEY」の代弁者たらしめるであろう。

この点で、来館者からの様々なフィードバックが、HPVを成長させていた。質問されて自身の知識不足を自覚し勉強する、反応の悪さから説明方法・内容を改善する、解説への感謝でモチベーションを向上させる、などである。また、来館者とのHPV活動外の交流による、平和意識の高まり、「伝える」活動の広がりも見られた。これらを通じて、HPVの知識・技能が向上し、個々に個性的で味のあるスタイルを発達させ、同時に平和意識（「ヒロシマの心」）や「伝える」意識が強化されている様子が見えてきた。すなわち、来館者とのフィードバック・ループによるHPVの自己制御（外部からのフィードバックとリンクした自分自身のコントロール：Carver & Scheier, 1998）が行われており、その発達の経路の多様性から、これを教育心理学で言う「自己制御学習」（学習者自身で決定・コントロールされる学習：上淵、2004参照）の一種と捉えることが可能である。そして、以上のような「フレームの問い直し」と「自己制御学習」のプロセスをたどることが、HPVの発達の一つの望ましいあり方と想定される（上淵、2008も参照）。

ここで、本研究の課題を述べる。本研究はあくまで5名のHPVからの聞き取り調査を基にしているに過ぎず、その意味で今回の分析結果はあくまで仮説生成でしかない、という限界がある。また、【技法】、【配慮】のいくつかの方法については、その一般性、有効性の確認も必要かもしれない。実際に解説の現場で来館者の納得や学習意欲の創出につながるのか、他のHPVも用いているのか、について今回の結果から一般化し過ぎることは厳に慎むべきであろう。また、【伝えていること】の分析が不十分で、これと【配慮】、【技法】との想定される関係性については検討を行えなかった。

以上のような問題点・課題を踏まえつつ、本研究の意義を考えると、HPVが「どう」伝えているのかに関して、来館者に対するある種の教育的配慮（【技法】、【配慮】）およびその具体的方法について、HPV自身の視点から明らかにし、そこからHPVの活動の課題について理論的な示唆をした点にある。そして過剰な一般化を恐れずに言うと、「ホンモノ」を背負おうと不斷の努力をしつつ、来館者に「配慮・対応」する、というこの課題は、他の平和ガイドにも共有される部分があるかもしれない。現場の知恵と工夫が試されているのかもしれない。

【参考文献】

- 上淵寿 2008「メタ認知の働きで自己制御学習が変わる」『現代のエスプリ』497号, pp49-58 至文堂
- 上淵寿 2004「自己制御学習」『動機づけ研究の最前線』上淵寿編著 pp108-125 北大路書房
- 大城牧子 2001「『沖縄戦を学ぶ』から『思いを伝える』へ」『歴史地理教育』第619号 pp16-18 歴史教育者協議会
- 北村毅 2006「〈戦争〉と〈平和〉の語られ方—〈平和ガイド〉による沖縄戦の語りを事例として—」『人間学研究』第19巻第2号 pp55-73 早稲田大学人間科学学術院
- 木下康仁 2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 源氏田憲一 2008「ある被爆者の原爆体験と証言活動—その思想的営為—」『戦争と民衆 戦争体験を問い直す』三谷孝編 pp122-137 旬報社
- 古賀徳子 2005「わたしと『平和の文化』」『根と柢』54号
- 戈木クレイグヒル滋子 2006『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社
- 佐伯胖 1993「人間をとりもどす教育」『教室にやってきた未来』佐伯胖・佐藤学・菊宿俊文・NHK取材班著 pp128-

155 日本放送出版協会

佐藤郁也 2008『実践質的データ分析入門 QDAソフトを活用する』新曜社

下鴨哲朗 2006『平和は「退屈」ですか—元ひめゆり学徒と若者たちの500日』岩波書店

菅靖子 2011「ミュージアムと展示」『パフォーマンス研究のキーワード—批判的カルチュラル・スタディーズ入門』高橋雄一郎・鈴木健編 pp174-205 世界思想社

杉田明宏 2006a「沖縄・平和ガイドの平和心理学的考察」『心理科学』第26巻第2号 pp30-47 心理科学研究会

2006b「平和を学ぶ営みへのチャレンジ—沖縄戦の継承活動から考える—」『人間と教育』第52号 pp32-39 旬報社

高嶋伸欣 2001「琉球大学生平和ガイドとともに歩んで」『歴史地理教育』第619号 pp22-23 歴史教育者協議会

富永佐登美 2012「非体験者による被爆をめぐる語りの課題と可能性—平和案内人の実践を手がかりに」『文化環境研究』第6巻 pp16-25 長崎大学

富永佐登美・葉柳和則 2010「非体験者にとっての継承活動の現状—長崎元平和案内人への聞き取りからの考察—」『長崎大学総合環境研究』第12巻第1号 pp29-40 長崎大学

根本雅也 2010「原爆を語ること、平和を訴えること」『平和と和解の思想をたずねて』足羽與志子・濱谷正晴・吉田裕編著 pp65-88 大月書店

広島平和記念資料館ヒロシマ ピース ボランティア 2009『ヒロシマ ピース ボランティア10年誌』有文社

深谷直弘 2008「原爆体験を継承していくための展示とは何か：長崎原爆資料館の一考察」『法政大学大学院紀要』第61号 pp97-107 法政大学大学院

2009「被爆の記憶の継承とその困難—長崎原爆資料館の展示戦略・実践の考察」『法政大学大学院紀要』第63号 pp135-142 法政大学大学院

福西加代子 2011「ミュージアム展示をめぐる人びと—広島県呉市・大和ミュージアムを事例に—」『コンタクト・ゾーンの人文科学 Material Culture/物質文化』田中雅一・稲葉譲編 pp38-58 晃洋書房

2012「戦争と平和を語り継ぐ—立命館大学国際平和ミュージアムのボランティアガイドの実践を事例に—」『立命館平和研究』第13号 pp29-41 立命館大学国際平和ミュージアム

丸野俊一（編）2008『【内なる目】としてのメタ認知 現代のエスプリ』497号 至文堂

箕浦康子 2009『フィールドワークの技法と実際Ⅱ 分析・解釈編』ミネルヴァ書房

村上登司文 2009『戦後日本の平和教育の社会学的研究』学術

出版会

Carver, C.S., & Scheier, M.F. 1998 On the self-regulation of behavior. Cambridge University Press.

Naono, A. 2005 "Hiroshima" as a contested memorial site; Analysis of making of a new exhibit at the Hiroshima Peace Museum. Hiroshima Journal of International Studies, 11, 229-244.

（付記）調査にご協力頂いた方々、分析にご協力頂いたお二方に、心より感謝いたします。

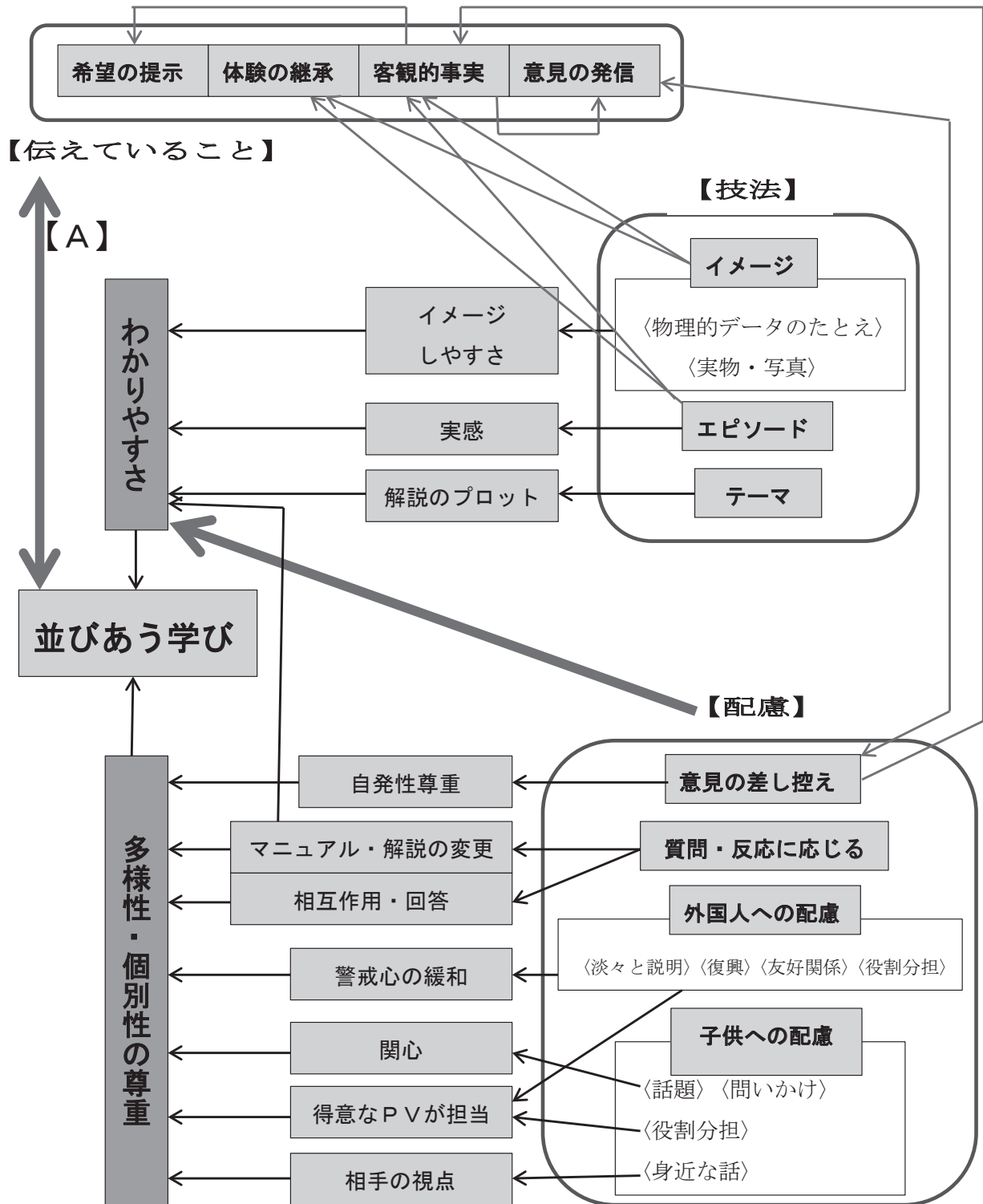


図 HPV の解説の図式

【注】

- 1) GTAとは、「データに密着した分析から独自の説明概念をつくって」、「統合的に構成された説明力にすぐれた」グラウンデッド・セオリー（木下, 2003）の構築を目指して実施される質的分析法である。しかし本研究の考察部分では、箕浦（2009）のガイドに従い、佐伯（1993）などの理論により、質的調査の結果の理解を助け、より広い理論的文脈に位置付けている。
- 2) 資料館より入手した2013年11月23日現在のデータでは、HPVに占める被爆体験者の人数は41名、被爆2世の人数は34名である（共に自己申告）。
- 3) 実際には資料館が参考資料として、館内解説のマニュアルを用意はしている。しかし配属当初の新人時代は別として、HPVが資料館のマニュアルのまま解説を行うことはあまりないようである（表1のA、B、Eさんより発言）。
- 4) 「客観的事実」と「体験の継承」の区別に気づかせてくれたのは、Aさんによる「ヒロシマとしての記憶」（＝客観的事実）と「個人としての記憶」（＝個別の被爆体験）は違う、という発言であった。
- 5) ここでは省略しているが、その後、さらに10名のHPV（被爆者3名、若手（30代）3名含む）に確認をしたところ、やはりほぼこの4分類であるとの回答を得た。
- 6) QDAソフトを用いた分析はデータ収集後に行ったが、実際には、2年のデータ収集期間中、集まったデータをトランスクリプト化した紙媒体に対して手作業での予備的分析（佐藤, 2008）は逐次実施している。
- 7) 厳密に言えば、ここでの「来館者への配慮」というテーマは事前に持っていたものというより、注6）の手作業での予備的分析のなかから浮上してきたものである。先の館長（当時）へのインタビューはその後に実施されたものであり、そこで「配慮」の問題が「来館者の多様性への対応」という問題と結びつけられた。
- 8) チェックは以下のように実施した。コードと、コードを割り振った部分の文のセットの一覧表に、コードの説明を添付し、コーディングが妥当かの判断を依頼した。妥当でない場合、該当すると思う他のコードを割り当ててもらった。その結果、全219ヶ所のコーディング結果のうち、妥当でないと判断されたものはAさん12ヶ所（5.48%）、杉田氏8ヶ所（3.65%）、双方とも妥当でないと判断したものが2ヶ所（0.91%）、少なくとも片方が妥当でないと判断したものが18ヶ所（8.22%）であった。双方とも妥当でないと判断したものは、該当するとされたコードが両氏で一致していたため、そのコードへ振り替え、それ以外については指摘を参考に筆者がコーディングをやり直した。また、杉田氏より他のものと区別がつきにくいと指摘を受けたサブカテ

ゴリと概念について、《ストーリー》としていたもの《テーマ》に《関心》としていたものを《話題》に名前を変え、説明に若干の修正を行った。加えて、《イメージ》〈身近な話〉と《子供への配慮》〈子供目線〉という2つの概念の文例がほぼ重なっていたため、これを《子供への配慮》〈身近な話〉へ統合した。

- 9) 佐伯（1993）では第一接面の後に第二接面が来る、という時間差が想定されているが、ここでは両者がHPVの解説中に混在していると想定する。
- 10) ここでの「コミュニティ」は地理的なものには限定されない。